

Counseling Room

家庭問題カウンセリングルーム

第146回

公益社団法人 家庭問題情報センター はせがわてつや 長谷川 哲也

夫を亡くしたあとで

恭子（仮名）さん（73歳）は最近、長い闘病の末に最愛の夫憲一（仮名）さんを見送りました。こどものいない恭子さんは、これからは長年苦楽を共にした夫の思い出とともに、残りの人生を静かに過ごそうと思っていました。ところが今、これまで縁遠くしていた夫の兄妹との関係で悩んでいます。

恭（恭子） 夫の実家は遠方の町にある旧家で、夫の兄がそこを継いでいます。また、その近所に夫の妹が住んでいます。夫は生前、兄妹とは距離をおいていて、年賀状のやりとりくらい交流でした。ところが、夫が亡くなった後、この二人がいろいろと言ってくるようになったのです。

カ（カウンセラー） どのようなことを言われたのですか？

恭 夫とは二人で入る合同墓を用意しています。しかし、夫の兄はせめて分骨をして実家の墓に入れたい。そうしないと無縁になってしまうなどというのです。お骨を少し分けてあげるくらいのことですから、いいじゃないかということかもし

れないですが、こどものいない私たちはそれなりに後のことを話し合って決めていたのです。

カ お二人で決められたのですね。

恭 葬儀はこちらの葬儀所でごちんまりと知り合いを呼んで執り行いました。これも夫の遺志でした。しみじみとした良いお葬式ができました。ところが、夫の兄と妹は、「四十九日の法要は、実家の菩提寺でやってほしい。あわせて納骨もして、今後の法事は菩提寺のほうでやってみようようにお願いしてある」と、どんな話を進めてしまっています。

カ そうなのですか。

恭 それに「自分たちにも相続権はあるがその権利は主張しない。しかし形見がぜ

ひ欲しいから遺品を見せてくれ」というのです。純粹に思い出の品が欲しいということもあるのですが、当然の権利みたいに聞こえるのです。そもそも夫は後で困らないように私のために正式な遺言を書いてくれたので、財産のことで何も心配する必要はないのです。でも、かといって断ることも角が立つようではないです……。

カ それで困っていらっしゃるのですね。

恭 本音としてはもう夫の兄や妹とは付き合いを絶ちたいです。そっとしておいてもらいたいです。でもねえ、なんともいっても血のつながった兄妹ですからねえ。

カ どうしていいものかということですか

ね。まだ、憲一さんが亡くなってから間もないのに大変ですなえ。

恭 夫を長いこと看病をさせてもらいましたし、覚悟もできていたのですが、やはり心にぽっかりと穴が開いた感じがです。バタバタしたことが一段落ついた今が本当にそうです。

力 故人は良い方だったのですな。

恭 まじめで口数の少ない職人氣質のひとでしたが、私にはいろいろよくしてくれました。優しかったですよ。

力 遺言をきちんと残したり、お墓のこともご夫婦でちゃんと話し合っておいたり、恭子さんが困らないようにされていらっしゃるよなえ。

恭 そうなのです。夫の方から言い出して。私はなんか縁起でもないよという感じがいたのですが、いろいろ考えてくれたいたんですなえ。無口だけどいつも私のことを気遣ってくれていて、困ったことがあるとさりげなく声をかけてくれました。

力 たくさん思い出がぁありでしょう。

恭 二人でよく一緒に庭いじりをしたものです。小さな庭ですけどね。さるすべりの木がぁありましてね。夏になると赤い花が咲くのを見ながら、さるすべりの花は長く楽しんでいいなえなんて、二人で話していました。あぁ、またさるすべりの

花が咲く季節ですなえ。

力 きれいな花を咲かせてくれるのでしょうなえ。

恭 楽しみですよ。

力 さて、今日のご相談ですが、憲一さんの亡くなった後、姻族関係終了届というものを本籍地の役場の戸籍窓口へ提出すると、憲一さんのご親族との親族関係を終了することができますが……。

恭 いえいえ、それはできません。親戚であることには変わりありませんもの。

力 そうですよな。それでは、どうしても供養のことや形見分けのことなどでお困りであれば、まずはご自身の本当のお気持ちを手紙などで伝えてみるというのはどうでしょうか。

恭 それも、なんかごたついてしまう感じがですしなえ。

力 どなたかに間に入ってもらうとか、場合によっては、家庭裁判所で調停をするということも考えられますよ。

恭 (笑) そんなおおごにはしたくないですよ。いえいえ、ごめんなさい。せっかく話を聞いてもらっているのに。でもなえ、なんだか親身に聞いてもらって夫のことを思い出していたら、なんだか自分の悩みが大したものではないように思えてきました。夫の兄妹なのだから、私だけが

独り占めしないでお骨を分けてあげればいいし、思い出の品をもらってもらうということも供養になるでしょう。なんか悪い方にばかり考えていたみたいです。

力 なるほど、そのように思われるようになりませんか。

恭 でもね。四十九日はありがたく出席させてもらいますけど、その後の実家での供養はお兄さんたちにお任せしますと伝えます。私ももう年だからなえと云って(笑)。

力 なにかご自身で吹っ切ってしまわれませんか。

恭 本当に不思議です。気持ちが軽くなりました。時間をとってもらってすいませんでしたな。ありがとうございました。

配偶者との死別は人生におけるもっとも大きなストレスだと言われています。いわゆる「喪の仕事」をしている中で、夫の兄妹からの介入は心をかき乱すものだったのでしょうか。しかし、そういった思いをカウンセラーに話す中で恭子さんは自分自身で解決の方向を見出しました。ただ耳を傾け寄り添うという行為の大切さと、人が持つ自身で困難を乗り越えていく力を改めて感じました。

